

次の文章を読んで、あとの問1から問6までの問いに答えなさい。

1 よく知っている人を相手に自己を語るのは簡単だが、お互いによく知らない相手に自己を語るとするのは非常に難しい。よく知っている相手との間に、^①共通の文脈ができあがっているので、その文脈にふさわしい自分を提示していけばよいから、ほぼ自動化した形で自己を語ることができる。「A」、相手がこちらのことを勇ましい豪傑とみなしているなら、自分の中の武勇伝的なエピソードを中心に語ることになるだろうし、相手がこちらのことを温厚な紳士とみなしているなら、自分の中のおだやかな部分を中心に語ることになるだろう。相手との文脈によって語り分けるからといって、けっしてだましているわけではない。どちらもうそではないのだ。困るのは、よく知らない人が相手である場合だ。共通の文脈ができあがっていないため、どのような自分を語り出していけばよいかがわからない。逆に言えば、共通の文脈による制約がないぶん、どんな自分でも自由に演出し、語り出していくことができる。だからこそ、迷い、悩んでしまうのだ。

2 こうした事情からわかるのは、僕たちは自分のことをいろんなふうに語ることができるということだ。それはつまり、僕たちの自分には決まった形ができあがっているわけではないということだ。このことを一般に、「自分のことをよく知らない」というふうに言うこともある。

自己紹介。

昔、学校でよくやった。クラスが新しくなったとき、順番に教室の前に出て、みんなの前で自分についていろいろとしゃべる。僕はあれが本当に苦手だった。いや、苦手というだけではない。僕はそのような行為の中に何の意味も見いだすこともできなかったのだ。僕が僕自身についていったい何を知っているのだろうか？^②僕が僕の意識を通してとらえている僕は、本当の僕なのだろうか？ ちょうどテープレコーダーに吹き込んだ声が自分の声に聞こえないように、僕がとらえている僕自身の像は、ゆがんで認識され都合よくつくりかえられた像なのではないだろうか？ ……僕はいつもそんなふうに考えていた。自己紹介をするたびに、人前で自分について語らなくてはならないたびに、僕は「B」成績表を勝手に書き直しているような気分になった。

むらかみはるき
(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』)

③ だれか聞き手を前にして自己を語ることで、自己物語が構築されていく、つまり自分の形が定まっていく。ということは、語り始めるときには、自分の姿を本人もはっきりとつかんでいないのだ。結局、自分の姿がおぼろげにしか見えないうちから、まずは語るところを始めなければならぬ。語ることによって、自分の姿が語りの方向につくられていく。初対面の人たちを前に自己紹介するときにとまどうのも、その人たちとの語り合いを経験しないうちは、その人たちとの間にふさわしい自己を構築することができないからなのだ。(中略)

④ 語り合いの中で、相手にわかってもらうように説明するのは当然のことである。また、相手によって同じ出来事でも違った説明の仕方をしていないと納得してもらえなかったり共感してもらえなかったりすることがあるというのは、幼いころからだれもが経験済みのことである。ゆえに、相手による語り分けというのは、ほぼ自動化しており、改めて意識されることはない。けれども、僕たちはだれでも自己物語を相手によって微妙に語り分けているのであり、新たな出会いによって新たな自己物語が生成し始めることがあるのだ。

⑤ 飲食店で高校時代の友だちといっしょに盛り上がっているとき、後ろのテーブルに職場の同僚がいたりしたらどうだろうか。気づいたとたんに、照れというか、ばつの悪さというか、^③何とも言えない気まづさを感じざるをえない。べつに職場のことを話題にしていたわけではなくても、ちょっとした困惑を意識するのがふつうだろう。それはな

ぜかと言えば、僕たちは相手によって見せている自分が多少ずれているからだ。高校時代の友だちに見せている自分と職場の同僚に見せている自分のどちらがほんとうでどちらがうそというのでなくとも、相手によって見せている自分が多少ずれていて、自己を語る仕方にも多少の違いがあつて当然なのだ。

えのもとひろあき

(榎本博明『ほんとうの自分』のつくり方

——自己物語の心理学』による)

(注) ○ ①⑤は段落符号である。